

第3章 教科等の指導

1 学習指導の基本事項

- 学習指導は学校での教育活動の中心であり、適切に学習指導を行うことは教師の大切な任務である。
- 学習指導は、生徒の成長を保障するものでなければならない。生きて働く知識を獲得させ、思考力、判断力、表現力など総合的な学力を身に付けさせたい。
- 指導計画・指導方法・評価などの工夫改善に努め、効果的な指導を行う必要がある。
- 個に応じた指導と基礎的・基本的な事項を確実に身に付けさせる指導、認知心理過程を考慮した指導等を工夫するとともに、楽しく充実した授業が行われるように心掛けたい。
- グローバル化、少子高齢化など社会の変化に対応した学習を展開するようにしたい。特に、自己教育力の育成は生涯学習の観点からも重要である。

(1) 学習指導の意義

21世紀を迎えて、学校教育は大きな転換期を迎えている。教育の役割が、現在の社会の要請にこたえ、未来を担う人材を育成することにあるならば、社会の変化とともに教育も大きく変わることが要求されるのである。

今までは、学習は「知識及び技能」の習得が中心で、先人の文化遺産等を吸収することだけで終わってしまう傾向が見られたが、時代の変化とともに望ましい学習指導の在り方も変わってきた。それは、思考力・表現力を備え、判断力があり、個性を發揮できる人、自己教育力のある人材の育成である。

これからの教育においては、生徒が進んで課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断したり、表現したりして、その課題を解決することのできる資質や能力

の育成を重視する学習指導が求められている。

(2) 個に応じた指導

学習の中心に生徒を置いて指導を進めようとするときに、まず考えることは生徒の実態である。

学校には、様々な生徒がいる。

この事実から学習指導は出発しなくてはならない。生育条件や生活環境による様々な違いがある。個性や能力によって学習の在り方は変わっていくべきであるが、これまで実際には一斉指導による画一化された授業が多く行われてきた。前述したような思考力、判断力、表現力などを育成するためには、そのような授業では不十分である。

そのためには、目標・内容を個に対応させたり、学習方法を個に対応させたりして、様々な学習形態を採用するなど、その状況に応じて工夫をするべきである。

(3) 充実した「分かる」授業

学習指導は、生徒が分かることが何よりも大切であり、授業中に充実感を持つようにさせることが重要である。

充実感を持つことにより、知識及び理解などの認知面についての学習効果も期待できる。

また、態度や意欲などの情意面も育てることができる。

以下、充実した授業のための留意点を挙げる。

- ア ねらいや課題を明確に自覚させる。
- イ 学習の方法を理解させる。
- ウ 創造性を發揮させる。
- エ 応用・発展ができるようにする。
- オ 実感が伴うように配慮する。

(4) 基礎的・基本的な内容の重視

教育課程の基準の改善のねらいの一つとして「国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育

の充実を図ること」と述べられている。ここで、個性化の視点とともに、基礎的・基本的な内容の重視が併記されていることに注意したい。

基礎・基本とは、次のようなものである。

ア 生きて働く最小限の知識及び技能

イ 人間としての在り方生き方の姿勢に関わる関心・意欲・態度

学習指導にとって基礎・基本は指導の要になるものである。その事柄が身に付かなければ、次の段階に発展していけないものである。また、国民として身に付きたい最小限度の内容を含むものである。

(5) 自己教育力の育成

生涯学習体系の確立が求められる中で、これからの学校教育は、生涯学習の基礎を培うものとして、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視する必要がある、そのために、自己教育力の育成が望まれている。

自己教育力を育成するための課題として、次の3点が挙げられる。

ア 学習意欲と意志の形成

イ 学習の仕方の習得

ウ 生き方の研究

それぞれの課題ごとに内容を見てみよう。

ア 学習意欲と意志の形成

学習意欲と意志の形成として、次のような点が重要である。

(ア) 学習課題は分かりやすく、やる気を起こさせるものであること。

(イ) 生徒一人一人の主体的活動を促すよう、指導・活動計画を立てること。

(ウ) 生徒の能力・適性に合ったものであること。

(エ) 動機付けが十分なされていること。

イ 学習の仕方の習得

心理学的な研究から、次のような方法がある。

(ア) 模倣・モデリング：はじめは、人のやっているよいと思われる方法をまねる。自分なりによいと思う方法を身に付ける。

(イ) 条件付け：学習しようという意欲を生むように条件付けて取り組む。

(ウ) 知的理解：自分で学習の方法としてこうしたらよいと思われる方法を行う。

(エ) 意図的形成：学ぶ方法・技能が身に付くまで計画的、持続的に繰り返し行う。

学習の動機と、学習し続ける意志を持ち続けることが必要である。

ウ 生き方の探究

社会が変化し、必要な知識や技能はますます増加し学校教育だけでは対応できなくなり、絶えず新しく学び続けることが要求される。

高齢社会の到来により、余暇の過ごし方など、人間としてのライフスタイルが問われるようになった。主体的に学び続ける意志・意欲を持ちながら学習していくことが求められている。

2 学習指導計画の作成

教育課程を具体化した教育計画が学習指導計画である。すなわち、学習指導計画は各教科・科目の指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導時間の配分、評価規準等を定めたものである。一般的に学習指導計画には、年度ごと、学期ごと、月ごと、週ごと、単位時間ごと、あるいは単元、教材、主題ごとなど、各種のものがある。

(1) 作成方法

学習指導計画を作成するには、次のような手順が考えられる。

ア 指導目標を定め、指導内容を選択する。

イ 指導に要する総時間数や、学習内容ごとの指導時間数を決める。

ウ 主な学習活動や学習形態を決める。

エ 各指導段階の教具や教材を決める。

オ 評価の項目とその観点及び評価方法を定める。

学習指導を進める上で、学習指導要領に定められた各教科・科目の目標を達成するために年間を見据えた綿密な指導計画を作成しなければならない。

(2) 作成上の留意事項

ア 担当する教師全員で作成する。

教師によって指導内容が大きく異なることは、生徒に無用な混乱を生じさせ、教師に対する不信の念を生んだりするおそれがある。担当者は十分意見を交わして、共通理解の上に立った指導計画を作成することが大切である。教師はそれぞれ個性を持ち、それぞれ得意とする分野や領域が異なることがあり、それだけに衆知を集めることによって優れた指導計画を作成することができる。

イ 基礎的な事項と発展的な事項とを明確にする。

学習指導要領の目標・内容を解説その他でよく理解し、かつ、各社の教科書等をよく調べ、基本的な事項と発展的な事項とを明確にし、重要性の高い順に指導計画に位置付ける。

ウ 個に応じた指導を重視する。

興味・関心、発達の段階、思考の仕方、学習の速さ、学習課題についての予備知識など、生徒一人一人に特性があるのが普通である。画一的な指導だけでは一部の生徒にしか対応できない。学習内容をよりよく定着させるには、個に応じた指導が重視され工夫されなければならない。

授業における個に応じた指導は、机間指導による個別支援の場、質問を受ける時間、教師から生徒に対する発問、レポートなどを効果的に設定することにより行うことができる。また、それらや試験の結果を検討し、個々の生徒の学習内容の習熟の程度や意欲を把握

し、授業のねらいが個々の生徒にとって適当かどうかを常に判断しながら学習者主体の授業設計をしなければならない。

このほか、学習指導計画の作成上の留意事項としては、次のようなことが挙げられる。

- ・教材を精選し、授業時数の配分を検討する。
- ・生徒の学習への動機づけを工夫する。
- ・社会、自然及び日常生活との関連を図る。
- ・学校行事との関連を図る。
- ・教材、教具の適切な活用を図る。
- ・生徒の実態に適合するよう配慮する。
- ・従前の学習指導の反省・課題を踏まえる。

3 教材研究の進め方

先に述べた学習指導計画に基づき、指導前に教材研究を行う。教材研究が十分でないといふ授業は創造できない。

(1) 教材の精選・構造化

教材の精選とは、教材を吟味し、選り抜くことである。構造化とは、ある教材の内容を中心的な内容と補助的な内容とに分け、その相互の関係を明確にし、教材の内容を再編成することである。

教材の精選・構造化を行うには、その単元において何が最も重要で基本的なものか、次に重要なものは何であるか、何が補助的な要素であるか、それらの間にどのような有機的な関連があるかを見きわめる必要がある。

次に、具体的な指導に当たって、どのような活動、内容、資料を取り上げ、それをどのように配列したらよいか検討する。

(2) 教材の開発

教材は学習の目標を達成するための素材であり、学習指導を進める上で欠くことができないものである。教科書は主たる教材として学習指導要領に準拠して作られ

ているが、「教科書を」でなく、「教科書で」教える立場に立ち、教師は専門職として指導目標を達成するために、より適した教材を開発する努力を惜しまないようにしたい。

ア 教材開発の視点

(ア) 目標分析と指導内容の具体化

目標を分析して、どうすれば目標が達成できるか具体的な教材を選び、構成を考える。

(イ) 生徒の興味・関心

生徒が意欲的に学習に取り組めるように、身近な素材を利用したり、作業活動により理解を深められる教材を工夫したりして、日常生活との関連を持たせる。身近な素材とは、物理的に生徒の手に届くものという意味だけでなく、生徒に真実感、切実感、親近感を持たせ、指導効果を上げやすい素材のことである。特に地域の特性、学校の特色を生かした教材は効果的である。

(ウ) 多様性への対応

生徒一人一人のよさや可能性を生かし、豊かにするという観点に立ち、教材を吟味して選択したり開発したりすることが必要である。

イ 教材化の手順および配慮事項

(ア) 指導の目標・内容の位置付けを明確にする。

(イ) 素材についての情報を集め、集めた情報の記録を整理・集積する。

(ウ) 素材を選択する。選択する視点には、次のようなものがある。

- ・生徒の生活場面や思考、経験に密着し、身近に観察したり、操作したり、資料化したりできるもの。
- ・生徒の能力、実態にあったもの。
- ・その素材をめぐって多様な学習活動が行えるもの。

ウ 教材の提示の方法

教材開発は内容だけでなく、効果的な提示方法も考える必要がある。

(ア) 印刷教材（資料プリント、参考書問題集、新聞、写真等）

(イ) ICT（BYOD、タブレット等）・視聴覚教材（プレゼンテーションソフト、クラウドサービス（Teams 等）、ネット上のデジタルコンテンツ、DVD、CD等）

(ウ) 展示物（標本、掛図、観察実験器具等）

（注）著作権には充分留意すること。

4 学習指導案の作成

(1) 学習指導案の意味と役割

何事にも詳細な計画が必要であり、学習指導も同様である。一般的には1単位時間の授業の実施計画が学習指導案である。

学習指導案は、略案と細案とに分けられる。略案は指導の要点を簡単に記したもの、細案は1単位時間の授業展開を詳細に記したものである。授業研究や研修のための授業では細案が用いられる。

(2) 学習指導案作成上の留意点

ア 教材として取り上げられている事実の学問的意義を理解し、知識の整理をして、その前後の教材との関連を調べるなど、教材研究を十分行う。

イ その教材に関する生徒の予備知識の程度など生徒の実態を事前に十分把握する。

ウ 1単位時間内の指導の目標・内容をしぼり、確実な定着をねらう。

エ 生徒の学習活動を中心に構成し、単位時間の流れをはっきりさせる。

オ 教師の指導事項を、具体的に時間の経過とともに記載し、生徒の動きやつまづきを予測し、その対策を立てる。

カ よい動機付け、よい発問、工夫された板書を考える。

キ 補助教材（視聴覚教材など）の活用の

場を綿密に位置付ける。

ク 生徒の個々の特性への配慮が読みとれる具体的で温かみのあるものにする。

ケ 生徒の興味・関心などの情意面についても十分な配慮をする。

(3) 学習指導案の一例（令和4年度～）

学習指導案		教科共通テーマ	
千葉県立〇〇高等学校 〇〇科 氏名			
1	日時	令和 年 月 日	曜日 限
2	場所		
3	学級	年 組	
4	科目		
5	単元名		
6	教科名		
7	内容のまとめ		
8	単元の目標		
	(1)		
	(2)		
	(3)		
9	本単元における言語活動		
10	単元の評価規準		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
11	指導と評価の計画		
次	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
1			
2			
3			
4			
12	本時の内容		
時間	学習活動	指導上の留意点	評価方法

(4) 学習指導案の活用

ア 授業中に点検する。

授業中に活用しつつ、必要な場合は点検し、微調整する。

イ 授業後に点検・検証する。

教材研究についての検討、生徒の反応の分析、目標の達成度などについての評価等を行い、今後の指導の改善に資する。

5 学習指導の展開

(1) 学習課題

生徒が意欲的で能動的な学習活動を展開するには、学習課題が生徒にとって分かりやすいものとして提示されなければならない。そのような学習課題の設定に当たっては、主として、次の3点に配慮する必要がある。

ア 知識・能力・態度等を身に付けさせるための生徒自身の思考や活動を引き出せるような課題であること。

イ 生徒自身が自己の問題として受け入れ、その解決に意欲的・積極的に取り組めるものであること。

ウ 生徒にとって努力すれば解決可能な課題であること。

いずれにしても、学習課題は生徒の興味・関心・過去の経験、知識や能力の発達水準等を考慮することが大切である。また学習指導要領に明記された、生徒の言語活動の充実と学習習慣確立にも配慮しなければならない。

(2) 学習指導過程

生徒の理解が深まり、認識が高まるように目標に沿って教材を組織立て、構造化したものが学習指導過程である。

学習指導過程は一つの定型があるわけではなく、多種多様である。

千葉県では独自の授業モデルである、「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の活用を推進している。

ア 見いだす

今までの学習内容や提示された資料等を基に疑問をもち、本単元（本時等）で解決していく課題を明確にする過程である。

イ 自分で取り組む

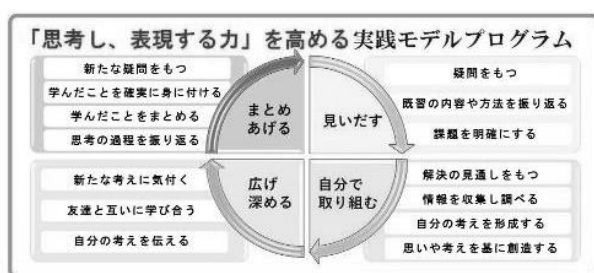
解決の見通しをもち、自分で考え、粘り強く課題に取り組む過程である。

ウ 広げ深める

「見方・考え方」を働かせながら自分の考えを伝え、友達の考えを聞いて疑問点を問い直すなど、互いに学び合うことを通して、多様な考えを理解する過程である。

エ まとめあげる

思考の過程を振り返り、学んだことをまとめる過程である。



(3) 学習形態

授業展開は、そのコミュニケーション形式に着目した場合、次の三つの学習形態がある。

ア 一斉学習

イ 小集団学習

ウ 個別学習

これらの詳細については、「6 学習形態の工夫」で触れる。

生徒の学習が主体的であるためには、個別学習と集団学習との有機的な関連を考慮しなければならない。

上の三つの学習形態を、授業の流れや教科内容の特質に応じて、弾力的に切り替えていき、しかも各形態の特色を十分生かしていくことが大切である。個別学習と集団学習とをうまく関係づけることが、学習の効率をあげることになる。

(4) 診断と分析

診断とは、生徒が学習活動の過程で示す言動や学力を個別の到達度に照らして評

価し、到達していないときはその原因は何であるかを分析することである。

生徒の学習能力を診断するには、その生徒の行動や反応（記述・発言内容・観察事項）を手がかりにする。診断項目を明確にして、観察・測定をすることが大切である。

診断結果は固定的なものでなく、流動的なものとして考え、その結果を個々の生徒の最大限の成長のために、生かさなければならない。

(5) 発問

授業を分かりやすくするためには、一人一人の生徒の思考が深められるような発問を工夫する必要がある。

ア 発問のねらい

- ・学習の仕方を指示したり、学び方を振り返らせたりする。
- ・理由や根拠を踏まえて、その学習に深さと広さを与える。
- ・学習したことを踏まえて、自己と他の学習者との対比において考えさせる。

イ 学習指導過程と発問形式

(ア) 導入の段階

- ・学習への意欲を持たせるために、知識や経験の有無を尋ねる。
- ・疑問を持たせ問題点を明らかにする。
- ・学習の方向を示し、計画を立てさせる。

(イ) 展開の段階

- ・確認のため前時の学習事項を尋ねる。
- ・発問をもとに理解を深めさせ、その度合いを確かめるとともに、学びを深めてゆく。
- ・理解を確実にするために練習をさせる。

(ウ) まとめの段階

- ・理解したことをまとめさせる。
- ・発展的な方向づけをする。

よい発問をするためには

- ・単元の目標、教材の本質を踏まえる。
- ・具体的で分かりやすい表現で行う。
- ・学習意欲をゆさぶるようにする。

(6) 板書

授業の流れの節々にそれぞれのねらいがあり、それを達成するための一つの手段として板書がある。

ア 板書の役割

- ・生徒の意識や思考を集中させる。
- ・発想を引き出す。疑問を引き出し、気付かせ、学習の問題として発展させる。
- ・思考を吟味し、深める。
- ・学習内容を整理し、理解を深める。

イ 板書の工夫

授業の流れに沿って計画的に何を、いつ、どの位置に、どう書くかを工夫する。

よい板書をするためには

- ・授業の目標（ねらい）を必ず明記する。
- ・効果的でタイムリーな板書の工夫をする（位置、文字の大きさ、記号や色の使い分け、適切な用語、図表・図式化）。
- ・授業の流れや重点が明確になるように工夫する（原則として、その授業中の板書は終了時まで消さない）。
- ・カード、展示物、I C T機器など、教具や資料との効果的な併用を図る。

(7) ノート指導

ノートは、授業における学習内容の記録であるとともに、生徒自身が考えたり、調べたり、練習したりしたことが記録されている生徒の思考活動の足跡であり、成長の記録となるものである。

ア ノートの果たす役割

- ・忘れないための記録
- ・書くことによる整理確認・深化・統合・

発展等

イ 望ましいノートのとらせ方

- ・主体的な自己の学習活動や思考の跡が残せるようにする。
- ・学習内容を板書から転写する際に、正確にわかりやすく書けるようにする。
- ・活用しやすいノートを作るために教科内容に則して整理の仕方を工夫させる。

よいノート指導をするためには

- ・ノートを取る時間を確保すること。
- ・ノートの点検を行うこと。
- ・個々にアドバイスを加えること。

(8) 学習環境

ア 学習環境とは

生徒が学習を進めて行く上での好ましい学習環境づくりのためには、次の3点が大切となる。

- ・学校全体が自主的な学習を支える学習空間であること。
- ・楽しく意欲的に学習できる雰囲気であること。
- ・温かい人間関係に包まれた学習集団であること。

イ 資料とは

学習を効果的に進めるために必要なものであって、副読本、参考書、辞書、図鑑、視聴覚資料などがある。よい資料の条件として、次のことが挙げられる。

- ・内容が偏らず、調和がとれている。
- ・時代の変化に即応している。
- ・能力開発に役立つ。
- ・具体性を備えている。

(9) 学習の評価

ア 評価について

(ア) 教育が目標に照らしてどのように行われ、生徒がその目標の実現に向けてどのように変容しているかを明らかにするものである。

(イ) 生徒がどのような点でつまずき、

それを改善するためにどのように支援していけばよいかを明らかにするものである。

したがって生徒にとっての評価は、自らの学習状況に気付き、自分を見つめなおすきっかけとなり、その後の学習や発達を促す意義を持っている。

イ 評価の機能と役割

(ア) 各学校、各学年段階等の教育目標を実現するための教育の実践に役立つようにする。

(イ) 生徒一人一人のよさや可能性を積極的に評価し、豊かな自己実現に役立つようにする。つまり、評価は生徒のための評価であると同時に、学校や教員が進める教育自体の評価でもある。

ウ 評価の基本的な考え方

(ア) 知識・技能（技術）の評価

- ・＜国語＞生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使っている。
- ・＜数学＞数学における基本的な概念や原理・法則を体系的に理解している。事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けている。
- ・＜外国語＞外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどについて理解を深めている。外国語についての音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けている。

(イ) 思考・判断・表現の評価

- ・＜公民＞現代の諸課題について、事実を基に概念などを活用して多面

的・多角的に考察したり、解決に向けて公正に判断したり、合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論している。

- ・＜数学＞数学を活用して事象を論理的に考察する力、事象の本質や他の事象との関係を認識し統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を身に付けている。

- ・＜家庭＞生涯を見通して、家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなどして課題を解決する力を身に付けている。

(ウ) 主体的に学習に取り組む態度の評価

- ・＜国語＞言葉を通じて積極的に他者と関わったり、思いや考えを深めたりしながら、言葉のもつ価値への認識を深めようとしているとともに、言語感覚を磨き、言葉を効果的に使おうとしている。
- ・＜地歴＞地理や歴史に関わる諸事象について、国家や社会の形成者として、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとしている。
- ・＜理科＞自然の事物・現象に主体的に関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとしている。

その他の評価の観点として、音楽における「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、解釈したり価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わっている。」という「鑑賞の能力」の評価がある。また、美術における「創造

的な美術の表現をするために必要な技能を身に付け、表現方法を工夫して表している。」という「創造的な技能」の評価がある。

※職業に関する専門教科は、知識・技能ではなく、知識・技術となる。

エ これからの評価について

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成31年1月21日）、文部科学省初等中等教育局「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平成31年3月29日）、文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」（令和3年8月）などを踏まえるようにする。

《参考・引用文献》

- ・中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申）平成28年12月
- ・小学校学習指導要領文部科学省平成29年3月
- ・中学校学習指導要領文部科学省平成29年3月
- ・高等学校学習指導要領文部科学省平成30年3月
- ・高等学校新しい学習評価Q & A 文部科学省令和4年3月
- ・図書教材研究シリーズ13『授業と教材－教材の正しい理解と活用のために』財団法人教育研究所協会平成10年
- ・評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校・中学校）
- ・言語活動の充実に関する指導事例集（小学校版・中学校版）
- ・（指導資料111集）「小学校版学習指導改善の手引き」千葉県教育委員会平成6年
- ・（指導資料112集）「中学校版学習指導改善の手引き」千葉県教育委員会平成6年
- ・『健康的で快適な学校環境を目指して－学校環境衛生の基準の解説－』第一法規平成7年
- ・『一人一人を大切にした教育－障害等に配慮して－』文部省平成8年

6 学習形態の工夫

（多く行われている三つの学習形態）

各教科等の指導に当たって、個々の児童生徒が学習内容を確実に身に付けることができる

ように、学校や児童生徒の実態に応じ、各種の学習形態（学習集団）を組織した、様々な指導の方法を工夫する必要がある。

（1）一斉学習

教師が活動の中心となり、同一の学習目標や教材によって、児童生徒が同じ時間の枠内で同一速度で学習を進める形態である。

〈長所〉

- ・学級全員に共通に理解させたい内容を指導するときに効率的、効果的である。
- ・話し合い活動に便利で、他者の意見や考えを聞いたり、自らの意見や考えを発表したりすることで思考力や判断力を養うのに適している学習形態である。

〈短所〉

- ・教師中心で、児童生徒が受け身の授業になりがちである。
- ・学力差、児童生徒の特性等の個人差に対応し切れない。

（2）グループ別学習（小集団学習）

学級のメンバーを少人数のグループに分けて、グループ単位で学習する形態である。

〈長所〉

- ・小集団なので一斉学習では発言できない児童生徒も発言ができて、意見交換が容易になる。
- ・小集団なので助け合いながらの活発な活動が可能で、学びの深まりが期待できる。

〈短所〉

- ・小集団であるだけに、ややもすると、一部の者だけが活動することになりかねない。

(3) 個別学習

児童生徒が、自分の学習課題や計画に応じて学習を進める学習形態で、自分の興味・関心や、学習進度に合わせて学習ができるという形態である。

〈長所〉

- ・つまずきのある児童生徒には丁寧な指導ができ、理解が早まれば発展的な課題が与えられるなど、個人差に対応できる。

〈短所〉

- ・教師は一人一人の児童生徒の実態把握や課題解決の過程で、十分な支援や指導、評価が必要である。十分な指導体制がとれないと個々の児童生徒の学習が停滞する心配がある。多様な考えを身に付けることが難しい。

今、三つの学習形態を挙げたが、これらを単一的、固定的に考えるべきではない。例えば、導入時には「一斉学習」でこれから取り組む学習内容の概要や進め方の確認をし、問題解決や探究活動場面では「グループ別学習」や「個別学習」を計画するなど、教師は指導の目標、内容、児童生徒の実態等を考え合わせながら、どのような学習形態がその時間に一番適切なのかを考えて指導計画を立案しなければならない。

7 個に応じた指導の充実

授業に臨む際、教師が考えなければならないのは、その時間、その学級で一番適切な学習形態は何かということだけではない。同じ「グループ別学習」という学習形態でも、児童生徒を習熟度や興味・関心等に応じた学習課題別で分けるなど、様々な《指導方法の工夫》を取り入れることで異なる教育効果が生まれる。

特に、児童生徒に「基礎・基本の確実な習得」をさせることをねらうには、「個に応じた指導」という視点での工夫が一層要求される。

学習指導要領においても、次のように示されている。

「児童（生徒）が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、児童（生徒）や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童（生徒）の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。」

（小学校（中学校）第1章総則第4の1（4））

(1) 「個に応じた指導」を取り入れる前になすべきこと

一人一人の児童生徒の学習内容に対する興味・関心や先行経験・知識はもちろんのこと、特性は千差万別のはずである。

教師が「個に応じた指導」を取り入れる前になすべきことは、児童生徒の「特性」には、それぞれ次のような側面があることを十分理解して実態を把握することである。

ア 同じ条件で学習しても、理解度、習得量、理解するのに必要な時間等は一人一人で異なる。

イ 児童生徒は異なる成育歴・生活環境をもつので、学習内容への興味・関心はそれぞれ異なる。

ウ 児童生徒には、言語や記号で論理的・抽象的に考えることが得意なタイプ、感覚的に思考するタイプ等があり、認識の仕方、行動の仕方、学習スタイルが異なる。教師が一斉授業に固定することなく、個に応じた学習指導を充実するためには、児童生徒の様々な興味・関心、学習や認識の仕方に応じた教材を開発し、多様な児童生徒が意欲的に学習に参加できるように、単元構成を工夫した学習指導案で授業に臨むことである。

(2) 学習指導法の工夫

ア ティーム・ティーチング（複数指導）

児童生徒の興味・関心を生かしたり、学習の仕方の特性などに対応した指導をしたりするために、複数の教員で指導に当たることは有効である。これがティーム・ティーチング（TT）といわれる指導である。

イ 少人数指導

文部科学省の教員加配措置もあって、平成13年度頃から特に多くなった指導法で、学級を複数の集団に分けて指導する形態のことである。習熟度に差がつきやすいと思われる教科で実施される場合が多い。2学級を3集団に分けて3人の教員が指導するパターン等、様々である。

学習集団の編成方法としては、機械的に分割、習熟度別、興味・関心に応じた編成等が考えられる。

ウ 小学校における教科担任制指導

中学校では教科担任制が一般的だが、小学校でも高学年の算数、理科、外国語活動・外国語等の教科を中心に教科担任制指導を導入している学校がある。小学校高学年における教科担任制は、教師の専門性を生かした学力向上、複数の教員による児童の多面的理解、中学校への円滑な接続等の観点で注目されている。

《参考・引用文献》

- ・教育方法改善シリーズⅠ『授業形態の改善』国立教育会館 平成7年
- ・教育方法改善シリーズⅢ『授業設計と展開の改善』国立教育会館 平成7年
- ・教育方法改善シリーズⅤ『学習評価の改善』国立教育会館 平成7年
- ・教育方法改善シリーズⅥ『学習環境の改善』国立教育会館 平成7年